

## 北海道で！縄文を知る

第2回

：縄文世界遺産〈かつてにフットパス〉

キウス周堤墓群で！ かつてにフットパス



小杉 康 (こすぎ やすし)

北海道大学大学院文学院考古学研究室教授  
埋蔵文化財調査センター長

1959年埼玉県生まれ。明治大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学（考古学専攻）。日本学術振興会特別研究員、国立歴史民俗博物館外来研究員、明治大学文学部助手を経て、現職。北海道大学埋蔵文化財調査センター長兼務。主要著書に『縄文のマツリと暮らし』（岩波書店）、『縄文時代の考古学』全12巻（共編著、同成社）、『はじめて学ぶ考古学』（共編著、有斐閣）、『火の考古学』（北海道大学考古学研究室研究紀要、第1号）など。日本考古学協会会員、北海道考古学会会員。

さっそく、第1回目の〈かつてにフットパス〉です。前回紹介いたしましたように、世界遺産『北海道・北東北の縄文遺跡群』を構成する北海道の縄文遺跡を一つずつ訪れて、その魅力と人類史的な意義を紹介します。ただし、世界遺産の構成資産である縄文遺跡そのものだけの紹介ではなくて、遺跡にいたるまでの道すから、周辺の関連する他の遺跡はもちろんのこと、遺跡を後世に手渡すと決断をしたその地域の人たちの暮らしぶりや周辺の自然などについても話題を広げながら、遺跡まで案内いたします。今回は、千歳市の『キウス周堤墓群』です。

毎回、目指す縄文遺跡までの道のりを、既存の道路標識やキロポスト（距離標）、はたまた商店の看板などを「かつてに」利用させていただいて、『コースマップ・イラスト』を提供します。でも、〈かつてにフットパス〉に出かける皆さんには、国土地理院発行の『2万5千

分の1』の地形図（45×55cm、1枚350円程度）も用意していただきたいと思います。スマホで同じ地形図を見ることもできますが、野外で大きな紙の地図を広げることで自分のいる位置を周辺の地形全体の中に位置づけることができます。歩いた道筋や発見したいろいろなことを鉛筆で気軽に書き込むこともできますので、ぜひ。

### 縄文文化とは

まずは、予備知識のおさらいです。縄文文化とは、今から約1万数千年前から約2千数百年前までの間に、ほぼ日本列島の各地で展開した、縄文土器を作り・使った人たちの生活文化の総称です。1万年を超えるような長い期間にわたっているので、全体を6つに区分して、順番に草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と呼んでいます。縄文の特徴を一口で言うことは難しいのですが、しいて言うならば狩猟・漁撈・採集生活（食料獲得）を基本としながらも、本格的な定住生活を送った点です。なぜ、それが特徴的かというと、従来の人類史においては食料獲得をする人たちは移動生活者であると考えられていたからです。縄文より前の旧石器文化の移動生活であれば、大地を掘って大規模な構築物を造ることはしません。周辺の生活環境が悪化すれば、よその土地に移ります。だから本格的なゴミ捨て場やお墓なども必要ありませんでした。一年を通して、そして数年から数十年に及んで同じ場所で生活する定住生活では、そうはいきません。日常生活のすぐそばに墓を作ります。いわば死者との共存です。儀礼や宗教などが発達するきっかけがここにあります。食料や財貨もため込むことができます。それらをめぐり争いや、またその争いを避けるための約束事（社会の仕組み）が発達します。ここにキウス周堤墓群の謎を紐解く鍵が隠されています。

### キウス周堤墓群

周堤墓とは、縄文後期の後葉の北海道に特有の墓地の一形態です。北海道内においても見られるところは限られていて、石狩-苫小牧低地帯の恵庭から千歳に

かけての周辺と、道央の空知の周辺、そして道東の斜里から標津の周辺だけです。特に千歳周辺のものは大きさ、数の点で群を抜いています。典型的な形態は、中央に円形の平たい穴を掘り、出た土をその周りに土手状に盛り上げたクレーターのような形で、それが「周堤」墓と呼ばれるゆえんです。その規模、最大級のものでは直径70mを優に超えます。本州の小さな古墳をしのぐほどです。くぼみの内側には数基から十数基の墓穴が作られています。古墳との違いは、周堤墓は1つの集団墓地であり、特定の権力者の墓ではない点です。そのような集団墓地である周堤墓が群集しているのがキウス周堤墓群の特徴です。どうしてこのような大規模な墓地群がこの地域に集中して造られたのか、縄文文化の最大の謎です。キウス周堤墓群の詳細については、本誌No.689掲載の豊田宏良さんの『史跡キウス周堤墓群－縄文墓地群を映す遺跡景観－』にゆずり、ここではこの謎を考えてみましょう。

### 縄文の魅力

周堤墓が造られた縄文後期の一つ前、縄文中期の頃は気温が少し高く暖かい時期でした。遺跡の数も多く、人口も増えたと考えられています。交易とっていいような物資の交流がかなり広域に行われるようになります。その中には産地が限定されるヒスイや黒曜石なども含まれていました。さて、キウス周堤墓群が位置する道央部、石狩-苫小牧低地帯は、本州島から延びてきた、渡島半島の噴火湾側と日本海側との2本の交易路が交差する交通の要衝で、ここからまた道東・道北へと延びてゆきます。このような情勢は後期にも引き続きます。特に千歳周辺では多くの遺跡が残され、そこにはヒスイに代表されるような多くの財貨が集積していました。しかし縄文文化では、このような財貨（富）の集積が戦争や権力社会を生み出す方向へと向かわなかったようです。特定の地域内で人口も増え、富も蓄えられてきたので社会的な軋轢も相当高まってきます。そこで縄文人たちは競い合うようにそのエネルギーを、祖先祭祀を中核とした信仰形態である周堤墓の増築へ向けて蕩尽的につぎ込むことによって、平

準的な集団関係を取り戻していたのではないのでしょうか。縄文文化の魅力、研究することのおもしろさの秘密がここにあります。

### かつてにフットパス

#### ：《川沿いのみち》コース

さて、予備知識はばっちり、いよいよ出発です。地図の用意はいいですか、前述の国土地理院発行の地形図『千歳』『長都』『恵庭』（1/25000）です。ルートの起点はJR千歳線の『千歳駅南口』①です。今回のルート（全長約24km）のテーマは「道」と「水」です。主に「国道337号線」に沿ってキウス周堤墓群へ向かいます。なぜ、わざわざ国道に沿ってなの、といぶかる方もいるかもしれませんが、その疑問は遺跡に到着すると解けるはずです。では、まずは足ならし、駅前の337号線を南西に向かって840m歩きます。左手の『もりもと本店』、右手の『福々まんじゅう一休庵』を過ぎて、錦町3丁目の交差点に到着。ここが国道337号線の『起点Origin』②です。そこを左に曲がり、南東に340m程歩くと『千歳橋』に至ります。いよいよ本格的に歩き出しますが、はじめは337号線というよりもこの千歳川の左岸に沿って下ります。橋のたもとには「千歳」の地名の由来を記した解説板があります③。ここからが本ルート第1区間（約3.6km）とした《川沿いのみち》コースです。千歳川の穏やかなせせらぎを聴きながら川風に吹かれて川沿いの遊歩道を歩きます。ところどころに「救助用うきわ」とロープが備えてあります。2km程歩くと『サケのふるさと・千歳水族館』に到着しますが、その少し手前の対岸には千歳川全域の治水対策をつかさどる千歳川河川事務所の高い塔が見えます。水族館の裏手のキタコブシやオニグルミ、エゾイタヤの林間にはひっそりと『サケの慰霊塔』④が祀られています。近くには、季節ではないので川岸に陸揚げされていますが、夏場から秋口にかけて稼働する「インディアン水車」もあります。サケなどの遡河性魚類こそが、北東日本域の縄文人たちの重要な食料資源であるとする「サケ・マス論」という学説があります。また、狩猟採集民でありながら定住生活を実現できたのは、

漁網を用いた定置漁具などで河川漁撈を行ったからとも考えられています。『サーモン橋』⑤のところで川沿いの遊歩道から337号線に戻ると、すぐ左手が『遺跡公園』⑥です。そこに何遺跡があるのかを公園の人にたずねると、「今はないけど、昔は遺跡がとれたそうですよ」といった、何ともほっこりする返答。きっと、以前は土器片などがたくさん拾えたのでしょう。公園の向かいには簡素な外観の『下水終末処理場』があります。人類が数千年前に発明した都市生活は、上水とともに下水をコントロールすることで継続可能なものになりました。水族館から1.6kmほど進んだところで、恵庭・島松方面との分岐点に至り、337号線は江別・長沼方面へと右折します。ガソリンスタンドが目印です。

#### ：《ロールペールラップサイロのみち》コース

ここからが本ルート第2区間（約3.3km）です。歩き始めるとすぐに千歳川に架かった『根志越橋』があり、そのたもとには「南無阿弥陀仏」の幟を立てた小さな野仏堂⑦があります。橋を渡り切ったところが本ルートの第一のビューポイント⑧です。ちょうど337号線のキロポスト『千歳まで4km』辺りです。北東遥かに夕張岳がかすみ、刈り取られた牧草がロールペールラップサイロになって点在する中景はさながらアースワーク（大地の芸術）です。近景には秋播きの小麦が金色の穂を突き立ててそよ風に揺れています⑧。橋を渡り、最初の十字路を左折します。『小川農場』の巨大なソフトクリームのオブジェが目印です。（左折しないで直進すると、陸上自衛隊東千歳駐屯地があるはずですが。この辺では道路を走る自衛隊のカーキ色の重車両をよく見かけます⑨。縄文ではまだ国家という仕組みや戦争という行為は発明されていませんでした。）左折した337号線の両脇には、ここでは青さを残した秋播き小麦の広大な畑やラップサイロの牧草地⑩が広がっています。やがて千歳川の支流（祝梅川）に架かる『祝梅橋』⑪を、さらに『祝梅排水橋』、『第2祝梅橋』を越えて、祝梅の集落に入ります。道路左脇には方墳のように土を盛られた『祝梅排水ポンプ場』があります。そこを左折して、337号線からいったん離れ、『中央農道 長沼5km』の道路標識に向かって進みます。

#### ：《農場のみち》コース

本ルートの第3区間（約3km）、《農場のみち》コースに入りました。これぞ「ザ・北海道」と言ったところの広大な農場が広がり、まっすぐな農道が続きます。第二のビューポイント⑫です。2段勾配のギャンブレル屋根や尖がり帽子で円筒形のサイロがある『菖蒲牧場』が左手に現れます。右手の農場の中には、かつて古砂丘の小山があり『丸子山遺跡』⑬と呼ばれていました。そこには「環壕遺構」と呼ばれる縄文中期の巨大遺構があり、何のために掘られた環壕なのかは未解明のままです。現在でも類例の発見数は片手で数えるほどで、石狩-苫小牧低地帯でのみ発見されています。後期後葉、札幌-苫小牧低地帯の周堤墓群が群集する地域と分布が重なっている点からも、今後の研究の進展が待たれます。なお、丸子山遺跡は、残念ながら畑地造成のために小山全体が削平されてしまい、いまはその面影もうかがうことはできません。左折地点から約2km地点で農道を右折して、さらに1km直進すると、再び337号線に戻ります。

#### ：聖地としてのキウス周堤墓群

左折して進むこと800m、道東自動車道「千歳東IC」の高架をくぐり、さらに400m進んで『キウス周堤墓群』⑭へ到着です。明治期に敷設された337号線の前身となる道路（由仁街道）は、巨大な2つの周堤墓（第2号・第4号）の真ん中を断ち切るように貫通しています⑮。世界遺産の登録に向けても、この点が懸念材料の一つでした。337号線は以前から生活に欠かせない道路として活躍してきましたが、現在ではそのバイパス道路として「道央圏連絡道路」が遺跡の東側を並走しています。遺跡を貫通する337号線が産業遺産「旧由仁街道」として『キウス周堤墓群』の史跡保存整備の一環に加わることも、そう遠くないことだと期待しています。

『キウス周堤墓群』、ここは当時の縄文の人たちの墓所であり、聖地です。かつては周堤の上に登り、さらにくぼみの中に入って見学ができましたが、現在は遺跡を踏圧から守る必要性からこのような見学路はありません。世界遺産への登録をきっかけに、私たちも「遺跡の見学の仕方」を学びました。ドカドカと遺跡に入

り込むのではなくて、研究の結果推定された当時の参道（墓参のみち）に佇みながら、縄文人の聖地の中で悠久の時の流れに思いを馳せる、そんな新たな散策路が遺跡の中に用意されました。

### ：帰路のコース

さて、本ルートの後半、帰路のコース（第4区間《オサッターのみち》、第5区間《ユカンボシ川のみち》）が待っていますが、紙幅がここで尽きてしまいました。その見どころの案内は併載したイラストマップに譲ります。ちなみに「キウス」とはアイヌ語で「キ（カヤ）・ウシ（しげるところ）」とのこと。遺跡の西側には、昭和期まで『オサッター（長都沼）』⑬と呼ばれた広大な沼沢地が広がっていました。干拓事業の『排水川・排水橋』⑭、真っ赤な実をつけたエゾニワトコ、どこ

までも続くまっすぐな道路（『中央長都農免道路』）が『オサッターのみち』コース（キウス-長都大橋間：約6km）の醍醐味です。千歳川の支流である長都川に合流するユカンボシ川⑮は今やか細い小川ですが、その両岸には「遺跡銀座」さながら、多くの遺跡が残されています。この一帯では農地開拓のために「殖民区画」が実施され、『東○線・南○号』などの地名が残されています。ジグザクに改修された流路と交錯しながら、碁盤の目の道筋を『サッポロビール庭園駅』⑯（ルートの終点）まで歩くのが、『ユカンボシ川のみち』コース（長都大橋-終点間：約6km）です。

歩き終えて、支笏湖からの恵みの水で乾杯！

（情報：歩行日2022.7.9）

